

## 後記

二〇二六年三月末に岩谷十郎先生が法学部を定年で退職されるにあたり、先生の多大なる貢献と学恩に報いるべく、本記念号の刊行が企画された。岩谷先生の門下生や、その薫陶を仰いだ法制史研究者は言うまでもなく、学部内からも多くの方に「ご寄稿をいただくことが出来たのは、偏に先生のご人徳の賜物と存じ、篤く御礼を申し上げる次第である。当方は、法学部在籍中から岩谷先生のゼミに所属し、現在に至るまでご指導を仰いでいるが、慶應義塾大学に赴任したのは数年前のことであり、先生の退職記念号の編集に携わることが出来たのは望外の喜びであった。この間、『法学研究』編集委員会、慶應義塾大学出版会の皆様にご方ならぬお力添えをいただいたことにも、改めて深く感謝を申し上げたい。

岩谷先生と一度でもお会いになった方は、本号を飾る先生のお写真をご覧になると、写真そのままの昔から変わらぬ若々しい笑顔と共に、先生が発される柔らかな言葉を思

い起こされるであろう。ゼミや合宿はもとより、学会や研究会の場などでも、それこそ親子ほどに齡の離れた相手に対しても決して笑顔を絶やすことなく、しかし真剣に耳を傾けるその姿は、先生のファンを多く生み出して来た。

そのような先生も、二〇一〇年代半ばからは目に見えてお忙しそうになられた。普段はこれまでと変わらず温和でにやかな笑顔でいらつしやるものの、言葉の端々に「苦労が滲むことも少なくなかったように記憶する。もとより、現在担われている塾の副学長職という余人をもつて代えがたい重責は、先生に対する人望と、なにより、先生ご自身の大学教育への思いに支えられていることは言うまでもない。しかしその一方で、先生の培われてきた法制史・法文化論の領域における貴重な学識の、より一層の深化と展開を期待している後進の者は多い（もちろん当方もその一人である）。学部の定年退職を機に、お身体を労りつつ、ご研究にも時間を振り分ける余裕を持っていただきたい、というのが、不肖の弟子の偽らざる思いである。

二〇二五年一二月

法学部教授 出口雄一